
smile man

L i t a l y

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

s m i l e m a n

【Nコード】

N 3 5 1 7 Q

【作者名】

L i t a l y

【あらすじ】

もうすぐ50になる。妻と娘がいる。それなりの役職にも就いている。私の趣味は、女装をして下着姿の写真をネットのSNSに載せる事だ。笑ってくれて構わない。喜劇になるなら、その方がいい。

「はいどーもこんばんわ アリサです
今夜はね、新しく買った下着をさっそくつけてみましたー
通販サイト見て想像したより、実物の方がスケスケ度が高くてエツ
チなの><
でもでも恥ずかしいの我慢して写真いっぱい撮ったから、みんな見
てね
リクエストなんかも、もしあれば応えられる範囲で応えますヨ！」

実に拙劣な文章だ。
これが私の日記だ。

私はもうじき50になる。
妻と娘がいる。

そう、私の性別は男性、社会的にそれなりの立場もある。

私の日課は、夜な夜な女装SNSに自分の猥褻な写真を投稿する事
だ。

「アリサさん、今日もお美しいですね！もし良かったら、もっと
下の角度からみたいですよ><」
趣味なのである。

「GJ！スケスケ具合がたまらんです！」
癒しなのである。

「あなたへ。麻衣と伊豆へ行ってきました。留守の間、ニヤー助に餌あげておいてください。それと、冷凍庫のものは勝手に食べないでください。あると思っていたものが無くなっていると、非常に困ります。あなたが給料から幾らか差し引いて家に入れているのは分かっています。食事くらいは、ご自分のお財布から賄ってください」

妻の書き置きなのである。

見合い結婚だった。

そもそも、私はそれまで33年間、ただの一度も女性と付き合った経験が無かった。

だから、お見合いで一度しか会った事の無い女性が、唐突に結婚を申し込んで来る事になんら疑念を抱く事も無かった。

まさか彼女が私の経済的安定だけを欲していたなんて、想像もしなかった。

女性というものを全く理解していなかった。

だから、一度しか会った事のない女性に「愛しています、結婚してください」なんて言われて、迂闊にも信じてしまったのだ。

母が死ぬ前に孫の顔を見せてやりたいという焦りもあった。

丁度お見合いの少し前に、母の身体に癌が見つかった。

だから私は結婚を急いだ。

そして子供を作った。

母は、娘が生まれる3週間前に逝った。

私の父を、私は覚えていない。

私が5歳になる頃までは居たらしい。

しかし私には全く記憶が無い。

5歳より以前の事も幾らか覚えてる。

しかし、父の記憶だけが何故か無い。

いや、正確には少し違う。

父「のような人」の記憶はある。

身体の大きな男が、幼い私を抱きかかえて微笑んでいる。

男は私の身体を頭上高くまで持ち上げる。

私はきゃっきゃとはしゃぐ。

不意に手が離される。

地面が一瞬で近づき、私の鼻っ面にめり込む。

落下、衝撃。

私は泣きじゃくる。

男は微笑んでいる。

男は、地面に顔から落ちて泣きじゃくる私を見てなお、微笑んでいる。

一度だけ母に尋ねた事がある。

私のこの記憶は、父のものなのか、と。

母は答えなかった。

だから私に父と断定できる人物の記憶は無い。

父が家を出てから、母は女手一つで私を育て上げた。

昼はパートタイムで働き、夜はホテルの清掃の仕事をしていた。

両方の給料を合わせても、安いアパートで質素に暮らすのが精一杯だった。

しかし私に泣き事をこぼす事はただの一度も無かった。

何故かいつも笑っていた。

私の前では。

だから、どうしても母に見せてやりたかった。

「息子が立派に育った姿」を。

父親がいなくても、あなた一人のちからで、十分わたしは立派に育ったよ、と。

証明したかった。

だから結婚をした。

子供を作った。

結局見せてやる事は出来なかったが。

責任だけが残った。

私に父親は居ない。

父親のいない子供の気持ちにはよく分かる。

だから、この責任を放棄する事が出来なかった。

妻が私を愛していない事には気づいていた。

語り合つて簡単に通じ合える次元のものではない事にも、気づいていた。

彼女は自身の欲求を満たす事にしか興味を示さない人間だった。

結婚する前に気づくべきだったが、気づく前に結婚してしまった。

そもそも、女性と付き合つた事すら無かつた私に、見抜けるはずが無かつた。

娘が生まれた。

申し訳なかつた。

だから育てた。

愛情を注ごうと思った。

しかし、分からなかつた。

私には父親がない。

父親が子供にどう接するものなのか、私には分からなかつた。

娘は「他の家の普通のパパと違って、全然父親らしくない父」を次第に疎み、嫌悪するようになった。

私は母がしていたように、いつもニコニコしていた。

そうすればいずれ距離が縮まると思った。

しかし妻や娘の目には「ニコニコ」ではなく「ヘラヘラ」に映っていた。

彼女たちの私への敬意が完全に失われるまで、私はその事に気づかなかった。

娘も妻も、私を完全に見下し、小馬鹿にして、お金を稼いで来るだけの道具だと考えるようになっていた。

責任だけがあった。

私は働いた。

働いた。

働いた。

責任の為に。

何か月が過ぎた。

何年が過ぎた。

17年。

結婚から17年が過ぎた。

17年、私は働く事だけをしていた。
働く事以外をしなかった。

奴隷のほづがまだ真つ当な生き物だろう。

なぜなら、奴隷は希望を抱く事を許されている。

心までは隷属させられない。

叶わなくとも、希望を抱く事は出来る。

報われなくとも、望む事が許されている。

私は、心まで殺す事を求められていた。

17年だ。

昔話をしよう。

高校の頃の事だ。

ある日私は登校中に唐突に腹が痛くなり、駅のトイレに寄った。

そうしたら電車に乗り遅れてしまって、そのせいで遅刻してしまっ
た。

1時間目の授業は体育だった。

私たちが学生だった頃はまだ更衣室などという気の利いたものはな
く、体育の授業は1組と2組合同で行われたため、体育の授業の前

後の休み時間には1組が男子、2組が女子の臨時の更衣室となった。

私のクラスは2組だった。

クラスに入ると、誰もいない。

無数の女子の制服が、机の上に散らばっている。

気づいたら、忘れ物を取りに戻った女子が悲鳴をあげていた。

警笛のような悲鳴をあげながら、私を指さしていた。

わたしは、誰かが脱いだばかりの女子の制服に身を包んで、呆けた顔でそこに突っ立っていた。

願望があったのだと思う。

小さい頃から。

けれど、言えなかった。

言える時代じゃなかった。

それ以上に、母が心配する事を鑑みれば、とても言いだせなかった。

「ぼく、本当は女の子になりたかった」

言えるはずが無かった。

女手一つで自分を育ててくれている母に、これ以上の気苦労など。

かけられるはずがなかった。

だから押し殺した。

ずっと、ずっと、誰にも言わず、自分でも気づかぬふりをして、押し

し殺してきた。

きっと、何年も抑圧されてきた願望が、誰もいない教室で、女子の制服を目の当たりにした時に暴発してしまったのだと思う。

記憶も自覚も無かった。

気づいた時には、同じクラスの女子が悲鳴をあげていた。

私は駆け付けた教員に取り押さえられ、すぐにブラウスとスカートを脱がされ、職員室に連行され、そして怒鳴られた。

「お前は、自分が何をしたか分かってるのか？」

すぐには分からなかった。

パンツ一枚で正座させられ、数人の教師に怒鳴りつけられ、私はただうつつむいて震えていた。

それが「女性」としての私の原体験だった。

それきりだった。

私が女性の服を身に纏ったのは、それ以降、ただの一度も無かった。最近に至るまで。

責任。

私は私に科せられたそれから逃れる事が出来ない。

いつもそうだった。

「母の為に」

「妻の為に」

「娘の為に」

いつも誰かの為に、私は男だった。

ある日、仕事を終えて家に帰ると、妻と娘は私の帰宅に気づかぬまま話していた。

「今日はアレ何時くらいに帰ってくるの？」

「さあ、また遅いんじゃない？」

「じゃあアレが帰ってくる前に寿司食いにいこーよ！アレはまたどこかで食って来るでしょ！」

「おお、いいわねえ、アレが帰ってくる前にね、また寿司食べたとかバレたら、アレ絶対また嫌な空気出してくるからね。ほんと嫌よアレ。文句があるならはっきり言えばいいのに。ああいう陰湿な男が一番苦手だわ」

「じゃあなんで結婚なんかしたのよ？」

「お金に決まってるでしょ。それ以外何があるっていうの？アレ、あんなんだけど、あんなだけあって、働く事にしか興味示さないからね、お金だけは無駄に持ってるのよ」

「うわママひでーww

ていうか、あたし、もうママとアレと子じゃなくて、ママとお金の子じゃんww

でもアレよりは諭吉のがマシだわ、マジでwww

アレの成分があたしの肉体にも混じってるとか思うとマジぞわぞわくるんだけどー」

「まーそんな事より、早く食へに行きましょう。アレが帰ってこないうちにね！」

私は音を立てずに、自室の扉を閉める。

息を殺して、妻と娘が出て行くのをじっと待つ。

気づいたら、私は今の季節は使っていない、娘の夏用の制服を身に纏って、携帯電話で写真を撮っていた。

昂っていた。

怒りか、悔しさか、寂しさか、悲しさか、性衝動か、倒錯か、私にはもう、分からない。

ただ、堪えがたい昂りがそこにあった。

耐え難かった。

熱を冷ます方法を探った。

ネットで、同じような格好に身を包む「男性」の写真を見つけた。

掲示板だった。

私もそこに投稿した。

リアクションは無かった。

ただ匿名の写真が、そこには延々と貼り付けられていく。

私も、それ以外の誰かも、ただ淡々と、ベルトコンベア上のルーチンワークのように写真をそこに載せ、それらは押し流されるように消えて行った。

たまたま、何かのきっかけでSNSというのを見つけた。

何かに突き動かされるように、私は「アリサ」という名前で、そこに登録した。

顔だけ伏せて、女装写真を載せた。

「綺麗な足ですね 制服姿、似合ってます」と思っています

リアクションがあった。

「もつと、エッチな姿も見てみたいな 今時の女子高生はスカートもつと上で履いてるよ アリサさん、もし良かったら・・・」

生まれて初めて、人から「私」が望まれた場面だった。私は応える事に必死だった。

「今日はちよつとエッチな写真載せちゃいます」

望まれている。

生まれてからただの一度も、誰からも望まれなかった「女性の私」が。

どう振る舞えばいいのかもわからない。

50年近く男として生きてきた。

今更女性的な振る舞いを身につけられるものか、自信も無い。

それでも、望まれているんだ。

「うわお！アリサさん素敵過ぎです！今度はお尻も是非！！」

応えたい。

私を望んで欲しい。

きっと、もっと正しい形はあるのだろう。

もっと正しく振る舞って、誠実に、実直に。

そのように信頼や愛情を獲得する術もあるのだろう。

けれど私にはわからなかった。

50年間、ロボットのよう生きてきた。

人としての尊厳を学んでこなかった。

学ぶ機会が無かった。

学ぶ事を求められなかった。

人としての私は、望まれなかった。

肉欲でもよかった。

応えなかった。

こんなみすばらしい私を求めてくれる人の想いに、報いたかった。

「アリサさんってば破廉恥」

だから脱いだ。

「もっとー！」

あられも無く。

「ねえもっとー！ほら、もっとー！」

私を必要としてくれるなら。

「おっさん、まじ気持ち悪いんだけど」

時に、蔑むようなレスポンスもある。

「こづいう場でそういう汚物晒して、恥ずかしいとか思わないわけ？」

分かっているよ。

「ねえあなた、最低最悪に醜いよ」

分かっているんだよ。

「おいコラあなた、公害撒き散らすな」

分かっている。

「おい」

わたしは、醜いよ。

「あなたにも妻とか子供とかいるんだろボケが。恥を知れよ」

間違っているんだろう。

「子供が知ったらどんな気持ちになると思う？お前、考えてみたことあんのかよ」

麻衣が見たらなんて言うかなあ。
最低だって言われるんだろうなあ。

こんな姿、知られなくなつて、麻衣の中で、妻の中で、私はいつだって最低だったのだけれど。

「俺は親の事で散々苦しめられてきた。ずっと孤独だった。俺の友達にも、同じようなのが沢山いる。どいつも、あんたみたいに自分の事しか考えない、無責任な屑親の元に生まれた可哀想な子供だよ」

彼の言う事は正しい。

私は間違ってる。

私が間違ってる。

「糞みたいな性衝動に翻弄されちゃってさ、家族を欺いて、子供を裏切つて、親として、人として、恥ずかしいと思わないわけ？

あの子の家のパパ、女装して下着姿で写真ネットに載せるのが趣味なんだよなんてクラスではれたら、それこそ自殺もんだよ？あんた自分がしてる事分かってんの？」

その通りだ。
私の存在は、恥でしかない。
いつだって。

「お前みたいな無責任な大人、死ねばいいのに」

ああそうか。

ありがとう。

答えがやっと分かった。

私がどうすればいいか。

これ以上間違いを重ねないために。

気づいたら、ダボダボの服を身に纏って、アクセサリをじゃらじゃら垂らした若者に首根っこを掴まれていた。

「おいおっさん、てめえ死にたいわけ？」

「あ？」

裏返りかけた情けない声で私は応える。

橋の上。

若者が立っているのは、手すりの向こう側。

そう、そっちが正しい側。

こっち側には川があるだけだ。

気づけば、わたしは。

気づけば、気づけば、気づけば、気づけば。

いつだって。

「なあおいコラ、おっさん、アンタ死にたいのかって聞いてんだよ」

若者は私を睨みながら凄む。

怖くは無い。

私は今、死のうとして、丁度橋の手すりをよじ登ったところだったのだから。
それを上回る恐怖など。

「なあおい答えるよおっさん」

こんな、ヤンキーみたいな恰好をして、きつと、善良な若者だ。死にゆこうとするものを止めるなど。

しかし、きつとその善良さは、酷く傲慢で無知で浅はかな正しさでしかない事を、まだこの若者は知らないのだろう。

仕方の無い事だ。
若いのだから。

「助けてもらっておいてなんだが、私は死を望んでいる。救いではなく、死を望んでいるんだ。

この意味が今の君にはまだ分からないだろう。もし私が救いを望んでいて、それが叶わないために死を手段と選んだなら、今の君の行為は正しい。

君は私を救おうとした。

それは正しく尊い行いだ。

しかし、私は救いを望まない。

あらゆる救いを望まない。

理解も、同情も、癒しも、救いも、天国も、私はいらぬ。

私はただ、死にたいだけなんだ。

だからどうか、この手を離して欲しい」

私は、諭すように、若者に語りかける。

すると、怒声。

さすがの私も少しびっくりする。

「うるっせえよ！
ごちゃごちゃよ！
意味分かんねえから！
知らねえっつの。
死にたきゃ死ねよ！
死ぬなんて誰も言ってねえよ！
言ってねえだろうがよ？！あ？聞いてんのかおっさんよ、おいハゲ！
てめえが生きようが死のうが知ったこつちやねえんだよ！死ぬボケ
！」

若者がふつつと、息を一つ吐く。

意味が分からない。

今時の若者は・・・なんて事は言いたくない。
言いたくないが、ひよつとすると、この若者は頭が可哀想な子なのか？

「俺はてめえに一言言いてえ事があるだけだっつつの。
どうせ死ぬなら5秒後も5分後も変わんねえだろうがよ。

5分ぐらいいいじゃねえかよ、いいだろ、な？いいだろボケくそハゲ！

てめえ、あんた、覚えてねえだろ。

俺の事。

どうせ覚えてねえんだろうな？

その眼には俺の顔なんて映っちゃいねえだろうよ。

あの時もアンタそんなだったよ。

死んだ魚みたいな目で人を見やがって。

糞つたれが。

いい加減にしろつづの。

マジ見てるだけで不景気ドン底だつづの。

アンタ覚えてねえだろつづがな、俺は覚えてるんだよ。

忘れるわけねえだろつづの。

な？忘れるわけねえだろ？

そうだろ？」

若者が、般若の形相で睨みを利かす。

私は仕方が無いからうなづいて見せる。

「俺は覚えてるよ。

あんたを、はつきりと覚えてる。

あんたみたいな不景気なツラ他にねえよ。

だから間違えようがねえ。

間違はなくアンタなんだよ。

俺があの日、駅前でさ、最低最悪にクールなラップで世の中ディス

ってる時にさ、あんた俺に近づいてきて、言ったんだよ。

かっこいいよって。

君、かっこいいよって、あんた、そう言ったんだよ。

そう言いやがったんだよ。

覚えてねえんだろ、あ？

あんた俺にかっこいいって、言いやがった。

俺が最低最悪にグレてさ、学校でも地元でも、どこでもハブられてさ、逃げ場も無くてさ、歌なんて歌えねえよ、ギターも弾けねえよ、怒鳴り散らすしか能がねえよ、だから怒鳴ったよ。

ラップだよ。

ビートだろ？

ヒップホップってやつだよ。

想いの全部でさ、世の中の糞ったれな事、デイスったよ。

ぶちまけた。

やりきれなかった。

許せなかった。

寂しかったんだよ。

でもどうしようもなくって、どうしようもないから、駅までさ、一人

で、俺、ラップしたんだ。

ラジカセもマイクも無しでさ。

そんなもんねえけど、沸いてくるだろうがよ。

言いてえ事いっぱいあんだよ。

ぶちまけてえんだよ、俺は。

耐えきれなかったんだよ。

それをさ、あなた、かっこいいって言うてくれた。

あなたがはじめてだった。

あんなだけだった。

俺をカッコいいなんてさ。

馬鹿げてるよ。

そうだろ？

馬鹿げてんだよ。

糞ったれがよ。

俺、生きてるよ。

糞ったれだけど、ほんと、あなたのおかげとか、死んでも言いたく

ねえけどよ。

あなた、俺を見つけてくれた。

俺がマジ死にたいくらい最悪の気分の時、見つけてくれたんだよ。

何が言いたいのか？

分かんねえよ。

俺にも分かんねえの！
分かるわけねえっつの。
俺にはそんな分かんねえよ。
ただあんたがここで、今、俺の目の前で、飛ぼうとしてた。
俺は、気づいたら」

気づいたら。

なんだろう。

なんだ、これは。

若者の目から、一筋、垂れる。

同じものが、なぜか、私の目からも。

「私は、生きていいのかなあ・・・？」

「知らねえっつの！」

「沢山間違いをしたんだ」

「知らねえっつってんだろっつがよ！」

「むしろ全部かもしれないな」

「うるせえよ！」

「私の人生、始まりから最期まで、全部が間違っていた」

「あんたは俺にかっこいいって言った!」

「最低最悪の間違いだったよ」

「てめえ、ぜってえ死なす!!!」

「そうしてくれ」

「死なせれるかよバカヤロウ!!!」

気づいたら。

気づいたら、私はまた日常に戻っていた。

「はいどもこんばんわ アリサです

今夜はね、新しく買った下着をさっそくつけてみましたー

通販サイト見て想像したより、実物の方がス Kes ケ度が高くてエツ
チなの><

でもでも恥ずかしいの我慢して写真いっぱい撮ったから、みんな見
てね

リクエストなんかも、もしあれば応えられる範囲で応えますヨ!」

実に拙劣な文章だ。
これが私の日記だ。
これが。

悲しみの描写も、苦しみの吐露もいらない。
ただ、私は吐き出す。
ありのままの私を。
私の中にある昂りを。
それしかもう、ないから。

醜いだろう？
卑しいだろう？

家族を省みる事もせず。
恥を知りもせず。

間違っているんだろう。
私のする何もかも。

「死ねよ、キモいだけだから！醜い化け物！」
その通りだよ。
しかし死ねないんだ。
しかし生き方も分らないんだ。
ここで、こう生きる以外に。

必要なんだ。

間違いをする事が。

許されなくても、それが必要だったんだ。

馬鹿げていても、歪んでいても、醜くても。

若者と、ラーメン、食いに行く約束したんだ。

あんたに、あの時の恩返しがしたいってさ、彼は言うんだ。

それまでは生きるって、約束させられた。

5分も5日も変わんねえだろうって。

だから5日待った。

そしたら、今は奢る金が無いってさ。

5日も、5か月も変わらねえだろ、俺がバイト見つかるまで待て！
ぜってえアンタにラーメン食わすからってさ。

私もいつかは、あの若者のように真っ直ぐになれるだろうか。
50のおっさんが、50年も己を歪ませ続けてきた、愚かな男がい
まさら。

あの若者なら言うんだらうな。

5年も、50年も変わらねえだろ、と。

明日は、かわいいTバックが届く。

Tバックを履いて、尻を出す私を望む人たちがいる。

無論、こんな私を嫌悪する人間も多い。

私は醜い。

彼らの言うとおり。

よく分かってる。

蔑まれて当然。

私は間違いを犯してる。

愛されたいなら、求められたいなら、もっと違う手段を選ぶべきだった。

しかし選べなかった。

自信がなかった。

やり方が分からなかった。

母の前で、妻の前で、娘の前で、上司の前で、ヘラヘラと笑っただけで精一杯だった。

それ以上を獲得する時間的余裕も、精神的余裕も、肉体的余裕もなかった。

限界だった。

理屈より、正しさより、逃げ場が欲しかった。

愚かな事だという自覚がある。

それでも、愛され方の分からないこんな私を、望んでくれる人がいた。

わたしは、今日も家族の目を盗んで、汚物をネット上に晒す。

私の名前は、アリサだ。

。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3517q/>

smile man

2011年3月16日18時48分発行